

言語態・テキスト文化論コース 教員紹介

石原あえか Aeka ISHIHARA

ドイツを代表する詩人ゲーテ（1749-1832）、特に彼と近代自然科学に関する研究が専門です。並行していわゆるゲーテ時代を中心とする近代科学技術や明治期における日独医学交流の歴史、またドイツ語圏の女性科学者などにも注目し、調査を進めています。手稿や公文書も含む一次文献を豊富に使う調査・分析手法が特徴のひとつです。文系・理系の枠にはまらず、文献を探したり、原書を読んだりするのが厭わない、意欲ある学生を期待します。

板津木綿子 Yuko ITATSU

20世紀前半のアメリカ文化史が専門です。また同時期の日米の文化交流史も勉強しています。近代産業社会における余暇の役割に関する言説を日米の知識人の論調や、映画を中心とした大衆文化を読み解くことで考えています。また、政治イデオロギーと消費文化との交点で、特に捻れが生じた時のポリティックスについても関心を持っています。アメリカ大衆文化全般について研究してみたい方を歓迎します。

エリス俊子 Toshiko ELLIS

一連のことばが「かたち」を成すところに立ち現れる「詩」は、様々な約束事で支えられている私たちの日常世界のあり方に、ささやかな、あるいは大胆な裂け目を切り開くことがある。

二十世紀前半の日本詩を中心に、日本の「近代」とモダニズムの問題について、また詩人たちが同時代の歴史状況とどのように格闘しながらことばを紡いでいったかについて、詩のテキストを読み進めながら考えています。詩を読んでみたい人、文学のことばと向き合ってみたい人、歓迎です。

大石和欣 Kazuyoshi OISHI

近代イギリスの文学テキストを社会や歴史という動態の中ににおいてとらえるのが私の研究です。ことばが言語態と

して発現する過程で内奥に織り込まれた時代精神、歴史の揺動、文化の潮流、民衆の喜怒哀楽、それらを生地（テキスト）の位相から紡ぎだそうとしています。現在進めている主な研究テーマは、18世紀から19世紀前半にかけてのチャリティの思想的系譜および女性と公共圏との関係性、19世紀末から20世紀前半にかけての建築の表象を、言語態として捕捉することです。

郷原佳以 Kai GOHARA

言語の物質性と、言語から立ち上がる想像の世界との逆説的な関係性に関心があり、文芸評論家・小説家モーリス・ブランショを中心とした19-20世紀フランスにおける文学言語論の分析を主な研究テーマとしています。とはいえ、文学言語を日常言語から切り離すことが目的なのではなく、むしろ、文学言語を、日常言語をも含む言語の本質を指し示すものとして、さらには、視覚芸術等の他領域にも通底する「イメージ」の探求として捉えています。したがって、読解対象は狭義の仏文学には限られません。また、硬直した哲学的図式が文学的テキスト分析によっていかに脱構築されるかにも関心があり、ジャック・デリダの著作の読解を続けています。近年は、レトリック、とりわけ比喩形象（フィギュール）をめぐる諸問題と言語思想との関係にも関心を抱いています。

小林宜子 Yoshiko KOBAYASHI

中世後期およびテューダー朝の英詩がおもな研究対象です。これらの時代の詩人たちが、古典古代や同時代のヨーロッパ文学から詩句やモチーフ、修辭的技法や意匠を借用しながら己の生きる社会への洞察や批判、憂慮を巧みに言語化していった過程を分析しています。12-16世紀のイングランドにおける文学と政治哲学、文学と法との関係を探ることも現在抱えているテーマのひとつです。「英文学史」の伝統が意図的に創出された宗教改革期の文献の読みを通じて、「英文学」や「英文学史」といった概念そのものを批判的に考察することにも関心があります。

秦邦生 Kunio SHIN

近現代イギリス文学、特にヴァージニア・ウルフ、ウィングダム・ルイス、ジョージ・オーウェルなど、20世紀前半のモダニズム以降の小説を中心に研究してきたが、最近ではカズオ・イシグロなど現代英語圏小説にも関心の幅を広げている。これと並行して、言語テキストと映像テキストとの横断的關係に着目して、特に小説から映画への翻案／アダプテーション研究も行っている。ユートピア／ディストピア、ノスタルジア、情動、リアリズムとモダニズムの緊張關係などが近年のキーワード。

武田将明 Masaaki TAKEDA

デフォー『ロビンソン・クルーソー』やスウィフト『ガリヴァー旅行記』など、十八世紀の英国小説を中心に研究しています。文学と国家の關係や、近代小説の発生と発展の世界史的な意味を考えています。近年は、大江健三郎から平野啓一郎、舞城王太郎、川上未映子、中原昌也など日本の現代小説に関する評論も発表しています。授業で主に教えるのは英語圏の小説と批評理論ですが、地域に囚われることなく小説とは何か、近代以降の文化とは何かという問題を深く考える学生も歓迎します。

竹峰義和 Yoshikazu TAKEMINE

専門は、現代ドイツ思想史、映像文化論。フランクフルト学派の思想家（とりわけTh. W. アドルノとA. クルーゲ）の映像メディアをめぐる理論と実践について考察する作業を軸に、近現代のドイツ思想を研究しています。授業・演習では、これまで、「ヴァイマル時代のドイツ映画」「映像とプロパガンダ」「ドイツの文学理論」などのテーマを扱ってきました。ドイツ語圏の思想や文学、文化に興味がある方はもちろん、メディアとしての映画やサブカルチャー全般について研究してみたいという方を歓迎します。

田尻芳樹 Yoshiki TAJIRI

私の専門はイギリス文学で、特に20世紀初めの文学、芸術の革新的な動きである「モダニズム」に関心があります。また、その「モダニズム」の流れの中で20世紀の小説と演劇の双方に革命をもたらしたサミュエル・ベケットとその周辺を研究の中心にしてきました。その他、南アフリカのノーベル賞作家J. M. クッツェーを初めとする現代の英語

圏小説や、批評理論も守備範囲にしています。結局のところ、存在とは何か、言語とは何か、といった根源的な問いを発している文学が好みます。

月脚達彦 Tatsuhiko TSUKIASHI

専門は朝鮮近代史。19世紀後半から20世紀前半の朝鮮の思想史を、歴史学の立場から研究しています。植民地とナショナリズムの問題が目下の研究テーマです。授業では、現代の正書法が確立する前の古い文体で書かれた韓国朝鮮語のテキストを精読しながら、東アジアにおける朝鮮の「近代」を考えていきます。韓国朝鮮の社会と文化について、歴史的な研究を志す学生の受講を歓迎します。

鳥山祐介 Yusuke TORIYAMA

専門はロシア文学。主たる研究対象は18世紀から19世紀前半——ピョートル一世による改革の開始からロシア文学史上最大のカノン作家であるプーシキンが登場までの時代、ロシア文章語のあるべき形が模索され、ヨーロッパ文化の枠内で近代ロシア文化の基礎が築かれていく時代——のロシアの言語文化です。急激な西欧化により社会の様相が一変する中で、言語が人々の心の中にイメージをつくり出すことはどのような意味を持ったのか、という問いが関心の中心にあります。こうしたテーマに直接取り組みたい方はもちろん、プーシキン以前のロシア文化のコンテキストへの視点を得た上でそれ以降の近現代ロシア文化を探求したいという方も歓迎します。

品田悦一 Yoshikazu SHINADA

十数年前から、近代における古典享受の枠組みを洗い直す作業に着手し、その成果を『万葉集の発明』にまとめた。その後、個別の事例を掘り下げる作業を進め、一昨年『斎藤茂吉』を公刊した。茂吉は偉大な歌人である以上に、近代日本人の一典型なのだと思い知った。

『万葉集』、短歌、古典……古臭い分野と思われるかもしれないが、決してそんなことはない。意外な通路であなともちゃっかり繋がっている。嘘だと思うなら試しに学んでみるがいい。

日向太郎 Taro HYUGA

私の専門は西洋古典学であり、とくに研究の中心は、ラテン語の韻文です。さらに、ラテン文学は長い受容の歴史があるので、ウェルギリウスやオウィディウスなどのローマの詩人が後代の作家、とりわけイタリアの作家に及ぼした影響についても関心があります。最近の授業でも、西洋文学における古典の伝統について扱っています。ギリシャ・ローマの言語文化やイタリア文学に興味を持っている人の研究を手助けできればと思っています。

ペティート, ジョシュア Joshua PETITTO

専門は日本近代文学ですが、ハーマン・メルヴィル（特に『モビー・ディック』）の日本における受容と翻訳史を研究しているため、アンテベラム期のアメリカ文学にも関心があります。批評理論としては翻訳論をはじめ、美学のイデオロギーの関係性や風景論に手を染めています。

星埜守之 Moriyuki HOSHINO

研究分野：1) シュルレアリスム：20世紀前半のフランスで生まれたシュルレアリスムは、詩人、画家、彫刻家、写真家など、多彩な表現者を巻き込んだ精神の冒険と言われています。このシュルレアリスムを、同時代の様々な思潮などとも結びつけながら研究しています。2) フランス本土以外の地域から発信されるフランス語文学の研究。カリブ海（マルチニックなど）、太平洋地域（ニューカレドニアなど）の新しい文学に関心があります。趣味：ポピュラー音楽（ロック、ジャズ、ソウルなど）を聴くこと。お酒（?）。

村上克尚 Katsunao Murakami

日本の戦後文学を専門にしています。これまでは、武田泰淳、大江健三郎、小島信夫を中心に、戦後の人間性（主体性）言説に抗う、日本の戦後文学作品に表現された独自の倫理を記述する作業を進めてきました。そこから派生して、現在では、（1）戦後女性文学における動物表象、（2）震災後文学における自然 - 人間観の変容、（3）沖縄における文学と思想などに関心があります。近現代の日本語で書かれた文学を研究対象としたい方の助けになればと思います。

山崎彩 Aya YAMASAKI

専門はイタリア文学です。19-20世紀にトリエステで書かれたイタリア語文学を研究しています。オーストリア帝国内として発展したトリエステは20世紀を通じて度重なる国境線変更で翻弄されましたが、その中から特異な作家たちが輩出され、彼らは現代イタリア文学において重要な地位を占めることになりました。近現代イタリア文学に関心がある人の研究の手助けができればと思います。

山田広昭 Hiroaki YAMADA

狭義の専門はフランス近代文学（とくにポール・ヴァレリー）ですが、浮気性(?)のためかドイツや日本の思想家にも手を出してきました。その背景には文学や芸術の政治的機能に対する関心があります。批評の方法論としては、物語論（ナラトロジー）および精神分析批評に比較的深くコミットしており、授業でもそれらを取りあげることが多くなっています。

吉国浩哉 Hiroki YOSHIKUNI

19世紀のアメリカの文学、とくに「アメリカン・ルネサンス」と呼ばれている時期の作家たちについて研究しています。具体的な名前を挙げれば、エドガー・アラン・ポー、ハーマン・メルヴィル、ナサニエル・ホーソーン、ラルフ・ウォルド・エマソン、ヘンリー・デヴィッド・ソローなどです。それに加えて、彼らの書いた時代に先行するヨーロッパでの思想文化運動（啓蒙思想、ドイツ観念論やロマン主義など）との関連についても考察を試みています。そのほか、現代アメリカのテレビドラマにも関心があります。

※これら授業担当教員のほかに、助教の堀井一摩さん（後期課程コース担当）と渡部直也さん（大学院担当）がプログラムの運営と学生の指導において重要な役割を担っています。

言語情報科学分科年度別卒業論文題目

*学際言語科学コースと言語態テキスト文化論コースは 2011 年まで言語情報科学分科という一つの組織として学生の教育および卒業論文の指導を行っていました。したがって以下のリスト(2006 年度以降のみを掲載)には、現在の学際言語科学コースに所属する教員が指導した卒業論文も含まれています(タイトル、執筆言語およびページ数を掲載。太字は言語態研究に関わる論文)。

平成 18(2006)年度

Entre personnalité et impersonnalité : Etude sur l'altérité du "je" hugolien dans les Feuilles d'automne	フランス語	68
触れ合うこと、すれ違うこと	日本語	68
語彙的複合動詞「～込む」の語彙概念意味論的分析	日本語	69
A Lexical Semantic Analysis of the English Instrumental Middle Construction	英語	57
中国語の「概数表現+名詞+“們”」表現の機能論的分析—日本語の数量詞遊離現象との対照を通じて	日本語	48
多様性の諸相—トマス・ピンチョン『重力の虹』試論	日本語	50
『豊饒の海』における認知の意味	日本語	35
Kontrastive Analyse des japanischen Romans "TSUGUMI" und dessen deutscher Übersetzung "Tsumumi" am Leitfaden der Frage, was vom Original verloren geht und was in der Übersetzung neu entsteht	ドイツ語	67

平成 19(2007)年度

生物・無生物の認識に与える言語の影響について	日本語	35
関西中央部方言における動詞の否定表現について—「『ン』の変化」という観点を以て	日本語	37
A Constructional Approach to Support Verb Constructions in Japanese	英語	66
上代日本語の音韻体系—上代特殊仮名遣いの言語学的解釈	日本語	55
ハイパーテキスト小説と「読者」	日本語	46
日本における英語教育の早期導入化について—言説分析	日本語	45
サイバースペースと身体	日本語	29
『於母影』の翻訳手法について	日本語	47

平成 20(2008)年度

Schwa Epenthesis in Halh Mongolian – An Optimality Theoretic Approach	英語	23
ワーキングメモリとオンラインの文処理の関係: 日本語版二重課題テストを通して	日本語	47
An Analysis of Narrative Technique in the Earlier Novels of Evelyn Waugh	英語	37
最後に出会う感情の意味: フランソワーズ・サガン初期二作品における語りの嘘	日本語	42
モバイル・メディアの現象学	日本語	99
左川ちかの詩における〈私〉〈世界〉〈夢〉	日本語	56
ディケンズとクリスマス—「クリスマス・キャロル」を中心に	日本語	57

平成 21(2009)年度

Transitions in Grammar Teaching: post-war junior high school English textbooks	英語	35
企業広告とコーポレート・アイデンティティ	日本語	51
統計翻訳の誤りの検出—依存構造に着目して—	日本語	28

平成 22(2010)年度

日本語における複合語アクセント付与にかかる制約	英語	26
日本語の母音融合規則—その例外と適用条件について	日本語	29
日本語の間接受け身とドイツ語の自由与格に関する対照研究	英語	46
日本語使役表現「V-(s)asu/- (s)aseru」について	日本語	35
スポーツ中継の物語化について—ライバル対戦をめぐる—	日本語	40
日本語の「くさい」における意味変化	日本語	47

平成 23(2011)年度

Modality as a Polysemous Category: From Root Control to Root Raising	英語	44
フランス語の状態変化および心理変化を表す中立的代名動詞の研究	日本語	26
スガシカオ試論—ファンクネスの批判的擬装—	日本語	57
On Italian Noun Phrases with Kinship-term Heads	英語	38
『ジョヴァンニの部屋』における同性愛	日本語	27
岡田利規『三月の5日間』について	日本語	25
『雪国』論—自己生成する「女」たち—	日本語	91
授業内における教師と生徒のコミュニケーション—誤りの自己訂正と言語能力の活性化を巡って	日本語	52

平成 24(2012)年度

ロシア語における子音の硬口蓋化	日本語	51
新約聖書ラテン語テキストにおける habeo と対格目的語の関係	日本語	37
自然言語処理による含意関係の判定	日本語	29
名は体を表すか:自動車名にみる音と意味の関係	日本語	42
夏目漱石『文学論』の表現論的分析	日本語	102
書物形態からみたジュネーヴ聖書	日本語	54

平成 25(2013)年度

英語圏帰国子女のコードスイッチングに見るジェンダー	日本語	73
中国語における「了」の体系	日本語	33
Rendaku in deverbal compounds(動詞由来複合語における連濁現象)	英語	54
中学校英語科検定教科書と都立高校入試問題の比較分析	日本語	44
テレビにおける音楽番組とは何か	日本語	66
大正期の谷崎潤一郎作品における東京の表象	日本語	92
三島由紀夫『天人五衰』における「海」の表象	日本語	40
村上春樹の描く悪について	日本語	30

平成 26(2014)年度 ※言語態・テキスト文化論コース第一期生

1960・70年代ドイツの文学史理論におけるガーダマー解釈学の受容—「文学」と「歴史」とを架橋する諸モチーフ—	日本語	31
ド・マンからカルースへ—言語の指示性とトラウマ	日本語	54
E.T.A.ホフマン『砂男』における「砂男」像の変容	日本語	56
ロマン的ロマンと愛—フリードリヒ・シュレーゲル『ルツィンデ』について	日本語	40

平成 27(2015)年度 第二期生

Narrating the Metropolis: <i>Low-Life</i> and Material Culture in Eighteen-Century England. (首都ロンドンの語り— <i>Low-Life</i> と18世紀イギリスにおける物質文化—)	英語	55
穆時英における断片化・反復の容態とその歴史性 —「上海のフォックスロット(ある断片)」を中心に—	日本語	146

平成 28(2016)年度 第三期生

テスの葛藤と言動の矛盾—意志と欲望と階級的慣習の狭間で	日本語	55
-----------------------------	-----	----

平成 29(2017)年度 第四期生

Alice's Adventures in Wonderland 翻訳分析	日本語	27
---------------------------------------	-----	----

平成 30(2018)年度 第五期生

『ユリシーズ』における女性と食の問題	英語	54
「ポスト・セカイ系」としての『輪るピンクドラム』	日本語	47
『アンナ・カレーニナ』におけるアンナ像	日本語	19

令和元(2019)年度 第六期生

宗左近『縄文』における贖罪と鎮魂	英語	51
------------------	----	----